



Title	『サント＝ブーヴに反論する』における知性の問題 : 批評と創造のはざままで
Author(s)	和田, 章男
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1999, 33, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47888
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『サント=ブーヴに反論する』における知性の問題 — 批評と創造のはざまで —

和田 章 男

サント=ブーヴの方法論を批判しながら、自らの文学観・芸術観を示そうとした『サント=ブーヴに反論する』は知性批判から始まっている — 「日ごと、私は、知性というものに大して価値を認めなくなりつつある。作家が、遠く過ぎ去ったさまざまな印象のうち、何ものかを取り戻すことができるのは、言い換えると、彼自身のうちの何か、つまり芸術の唯一の素材となるものに到達できるのは、知性の埒外でのことでしかないのが、私には日増しによく分かってきつつある。」この「序文案」(Projet de préface)においてブルーストが主張しているのは、芸術の素材となるのは「感性」、「感情」、「本能」など「われわれ自身の内的本質」に関わるものであって、これらに対して知性は無力であることだ。そして芸術作品の中核となるべきものとして無意識的記憶の例がいくつか挙げられる。しかしながら、序文の末尾において、知性が二次的なものにすぎないことを理解するのは知性であるとして、その価値を復権させて、これまで言われたことのない知性の問題を扱う意図を表明しつつ、芸術創造そのものではなく、文学論・芸術論をめざすことになる。本論では、知性の問題がどのように浮上してきたのかを検討するとともに、知性に基づく文学批評と、それとは別次元にあるはずの芸術創造とがどのように関連しているかを考察する。

1908年のおそらく7月頃、カブール滞在中に記されたと思われる「Pages écrites」(「書かれたページ」)(カルネ1、7v^o)の項目を見ると、

同年の前半に小説創作の試みがなされていたと推測できる。実際、その一部はベルナール・ド・ファロワによって発表されたが、その後失われてしまった。プルーストはその年の10月から11月始めにかけて、ヴェルサイユに滞在するが、その間喘息の激しい発作に幾度か見舞われる。死の脅威を感じた彼は、生きている間に成し遂げるべき仕事に対する自覚を持つようになる。その頃友人のジョルジュ・ド・ローリスに宛てた書簡¹⁾には、ヨハネによる福音書の言葉（« Travaillez pendant que vous avez encore la lumière. » 「まだ光のある間に仕事をせよ。」）²⁾に寄せて、その意志の表明がなされている。残されている時間が多くないと感じた作家は、長い年月を要すると思われる小説創作ではなく、とりえず彼独自の文学観を表すべく、『サント=ブーヴに反論する』を書こうと決意する。

プレイアッド版において« La Méthode de Sainte-Beuve »（「サント=ブーヴの方法」）と題された断章の冒頭には次のような一節が見られる——「最も言いたいことが突然言えなくなるような時期に私は達した、あるいはそういう状況の中にいるのだ。」³⁾ 病気の悪化のせいで、死の脅威にさらされているプルースト自身の心境が語られていることは明らかであろう。さらにはヨハネによる福音書の同じ言葉を引用しつつ、仕事への意志の表明が語られているのも、上に見た当時の書簡の内容と一致している。保存されているメモ帳4冊のうちの一冊目であるカルネ1は『サント=ブーヴに反論する』の執筆を始めようとしていた作家の試行錯誤の跡が見られる最重要の資料である。その中に、1908年10月末から11月始め頃に記されたと推測できる次のような一節がある。

Peut-être dois-je bénir ma mauvaise santé, qui m'a appris, par la leçon de la fatigue, l'immobilité, le silence, la possibilité de travailler. Les avertissements de mort. Bientôt tu ne pourras plus dire tout cela. La paresse ou le doute ou l'impuissance se réfugiant dans l'incertitude sur

la forme d'art. Faut-il en faire un roman, une étude philosophique, suis-je romancier ? (Ce qui me console, Gérard de Nerval Voir page XXX de ce cahier) (11r^o)⁴⁾

「おそらく私は自分の不健康を祝福しなければならないだろう。というのも疲労の重みによって、私は不動と沈黙と仕事の可能性を知ったからだ。死の予告。まもなくおまえはもはやそういうことをすべて言うことができなくなるだろう。怠慢、疑問、あるいは無能が芸術形式についての躊躇の口実となっている。小説を書くべきか、あるいは哲学的論考を書くべきなのか、私は小説家なのだろうか？（私を慰めてくれるのは、ジェラルール・ド・ネルヴァルだ。このノートのページXXXを見ること）」

この覚え書きの前半はまさしくヴェルサイユ滞在当時のプルーストの状況を示していると同時に、病気と仕事を対立的に捉えるのではなく、不動と沈黙を余儀なくさせる不健康な状態こそ創作活動にふさわしいと考える、作家の積極的な態度が表れている。このように書簡、カルネ、そして論考自体の内容の一致から、『サント=ブーヴに反論する』の理論的な断章が書かれている「プルースト45」という原稿は、手紙やカルネの中の覚え書きと同じ時期、つまり1908年の11月頃に執筆されたと推定されている。⁵⁾確かに、日々の状況が直接反映されている書簡と、不規則ながらも時間順に書き込まれているカルネとは、年代設定において同列に扱ってもさしつかえないと考えられるが、より普遍的な立場で書かれる論考については慎重な扱いが必要となろう。といっても執筆当時の状況が、直接的あるいは間接的に反映されうることとは否定できないし、上で引用した論考の一節が、同時期に書かれたことも間違いないと思われる。しかし同時期といっても幅があるだろう。むしろここで問題にしたいのは、いつ書かれたかという、年代設定の議論ではなく、作家の思索の軌跡である。より具体的に言えば、カルネに記されている覚え書きと『サント=ブーヴに反論する』の

関係とその執筆順である。

先に引用したカルネ1の一節の後半部分に注目しよう。そこには芸術形式についての躊躇が記されている。これは1908年12月半ば頃の書簡⁶⁾に見られる、テーヌ流の古典的形式のエッセーか、母との会話によるレシ形式かという迷いとは別のものである。覚え書きを記した段階では、「小説」を書くべきか、「哲学的論考」を書くべきかを迷っていたのだ。しかるに『サント=ブーヴ』の草稿である「プルースト45」においては、小説創作ではなく、文学・芸術に関する理論的考察をめざして執筆を始めていることは明らかである。またこの覚え書きにおいて、芸術形式についての逡巡の原因を« *paresse* »（「怠慢」）、« *doute* »（「疑い」）、« *impuissance* »（「無能」）に帰している。そしてプルーストはその一例としてネルヴァルを挙げ、彼のような偉大な作家でさえ、芸術形式についてのためらいがあることを指摘することにより自らの迷いの慰めとしている。カルネの« *page XXX* »と記されているページには次のような覚え書きが見られる——「私を慰めてくれるのは、ボードレールが同じ主題について散文詩と『悪の華』を書いたこと、ジェラルール・ド・ネルヴァルが韻文詩と『シルヴィー』の一節においてルイ13世風の同じ城やウェルギリウスのミルテなどを描いたことである。実際のところ、これらは弱さなのだが、われわれは大家作家たちを読むことによって、彼らの作品より価値のあるわれわれの理想の衰えを権威づけているのだ」（13^{v°}）⁷⁾ ところで、1909年春頃に書かれたと推測されるカイエ5および6には、『サント=ブーヴ』に組み入れられるはずのネルヴァル論が含まれており、その中に同趣旨の文が見られる。

Chez de tels génies la vision intérieure est bien certaine, bien forte.
Mais, maladie de la volonté ou manque d'instinct déterminé,
prédominance de l'intelligence qui indique plutôt les voies différentes
qu'elle ne passe en une, on essaye en vers, puis pour ne pas perdre la

première idée on fait en prose, etc.⁸⁾

「このような天才たちにあっては、内的ヴィジョンはとても確かで、とても強い。しかし、意志の病、あるいは明確な本能の欠如、知性の優越のせいで、そのようなヴィジョンが一つの道をたどるよりもむしろ異なるいくつかの道が示され、韻文で試みた後、最初の想念を失わないように散文で試みたりするのだ。」

ここにおいてもプルーストは、ボードレールやネルヴァルのような天才的な作家の場合でも、形式についての迷いがあったことを指摘しているのだが、注目に値するのはその原因として挙げている三つの要素、つまり「意志の病」、「明確な本能の欠如」そして「知性の優越」である。前二者はカルネに挙げられていた「怠慢」と「疑い」と関連したものであるが、「知性の優越」はカルネの覚え書きには全く見られなかった要素である。プルーストの考えでは、知性は唯一の芸術形式の発見を妨げるものなのである。

『サント=ブーヴに反論する』の序文が知性批判によって始まることは上述した。この序においては、無意識的記憶との関連で知性が問題にされ、真の過去は知性によっては蘇らないことが繰り返し主張されている。ところで、作家の思索の跡をたどることが可能なカルネにおいては、知性に関する言及はいつ、どのように現れているであろうか。ジャン=マルク・カラントはカルネ1の次の節を引用しながら、知性批判は無意識的記憶についての思索と結びついていると述べる。⁹⁾

Nous croyons le passé médiocre parce que nous le *pensons*¹⁰⁾ mais le passé ce n'est pas cela, c'est telle inégalité des dalles du baptistère de St Marc (Photographie du Repos de St Marc à laquelle nous n'avions pas repensé, nous rendant le soleil aveugle sur le canal) (10v°)¹¹⁾

「われわれが過去を陳腐だと思うのは、過去を考えるからだ。しかし過去はそ

んなものではなく、サン＝マルコ寺院の洗礼堂にある不揃いな敷石のようなものだ（われわれが再び考えたことのない『サン＝マルコ寺院の休息』の写真が運河の上のまばゆい太陽をわれわれに返してくれる）」

プルーストが下線を引いて強調している「*penser*」（「考える」）という行為が知性に基づくものとみなしても間違いないであろう。実際、「プルースト45」においても、知性との関連で同じ動詞が繰り返し使われている。しかしながら、「知性」（*intelligence*）という言葉そのものはカルネのこの段階では現れておらず、「知性」が直接に問題にされているわけではない。このくだりの直後に芸術形式についての迷いが記されるのだが、上で見たように知性がその原因の一つとして挙げられてはいない。他方、後に書かれたネルヴァル論においては「知性の優越」が問題にされるようになることを考慮すれば、知性が文学を論じる上で重要な要素となってくるのは無意識的記憶との関連においてではないと思われる。

さて、「知性」という語そのものが登場するのは以下の節においてである。

*S^{te} Beuve (Causeries du Lundi tome XIII) nous disant que Musset avait été adopté par la meilleure société. Naturellement tout cela avec intelligence [...] mais c'est la vie spirituelle prise par l'envers par ce qui ne donne aucune idée d'elle.(14v^o)*¹²⁾

「サント＝ブーヴは（月曜閑談第13巻）、ミュッセは最高の社交界に受け入れられたと言う。もちろんそういうことをすべて知性をもって言う。しかしそれは裏面から捉えられた精神生活であって、それについていかなる観念も与えてくれない。」

*Écrivain disant des choses intelligentes et pas très justes dans la conversation.(15r^o)*¹³⁾

「会話において知的ではあるが、あまり正確ではないことを言う作家」

Ste Beuve paraît plus intelligent que Flaubert.

Débuter par méfiance de l'Intelligence.(17v^o)¹⁴

「サント=ブーヴはフローベールよりも知性的であるように思える。

知性に対する不信から始めること」

カルネ 1 においては14v^oで初めてサント=ブーヴに関する言及が現れ、それとともに「知性」(intelligence)という言葉が登場する。要するに、知性の問題は無意識的記憶との関連ではなく、サント=ブーヴとともに現れるのだ。それは社交界や会話など、芸術の本質とは離れた場面で活動する能力であるとともに、サント=ブーヴの批評の方法論とも関わっている。サント=ブーヴとフローベールが知性面において比較され、前者の優位が暗示されているが、これはまさしく批評家と作家の対立が問題になっていると考えられる。知性による批評と、より深く、内面的な自我による芸術創造との対立である。

17v^oに記された「知性に対する不信から始めること」という覚え書きは、言うまでもなく『サント=ブーヴに反論する』の導入部に対する指示であり、実際先に見たように「プルースト45」は知性批判から始まっている。サント=ブーヴの知性に基づく批評方法は芸術の本質を捉えることができないことを論じるため、同論考の冒頭において、知性に対する不信を表明しようとしたのだ。そして知性の対極にあり、芸術の本質を成すものとして無意識的記憶の例を提出したのが序文草案である。しかしながら、プルーストは序文の末尾において、知性を批評するのもまた知性であるとの考えを述べ、知性に基づいて彼自身の文学観・芸術観を言明することを優先し、無意識的記憶に基づく小説創作の試みは先延ばしにする。

「サント=ブーヴの方法」の冒頭部の執筆時期が、内容の類似からカルネ

1の11r^oのメモおよび書簡とほぼ同時期であるとされていることに対して上で疑問を述べた。そしてカルネの覚え書きでは、小説を書くべきか、哲学的論考を書くべきか迷っているが、「プルースト45」において執筆を始めた際にはその態度ははっきりしており、哲学的論考をめざしている。したがって問題のメモと『サント=ブーヴ』執筆との間には多少なりともずれがあると考えられる。さらに、知性批判で論考を始めようという考えが現れたのは、上で見たように17v^oにおいてであり、11r^oとはかなり隔たっている。もちろんその間に経過した時間を計量することは不可能であるが、覚え書きと本文執筆との間に時間的な隔たりがあるばかりでなく、思索の進展が見られるのである。つまり覚え書きの段階では仕事を成すべき意志はありながら、何を書くべきかはっきりしていなかったが、サント=ブーヴおよびその知性的な批評方法に関する考えが浮上することによって、小説創作に先立ち、自らの文学観・芸術観を論考の形で表明しようという意志が明瞭になったのである。

さて、「サント=ブーヴの方法」の冒頭において、プルーストは次のように論考の計画を述べている。

Je suis arrivé à un moment, ou, si l'on veut, je me trouve dans telles circonstances où l'on peut craindre que les choses qu'on désirait le plus dire — ou, à défaut du moins de celles-là, si l'affaiblissement de la sensibilité et la banqueroute du talent ne le permettent plus, celles qui venaient ensuite, qu'on était porté, par comparaison avec ce plus haut et plus secret idéal, à ne pas estimer beaucoup, mais enfin qu'on n'a lues nulle part, qu'on peut penser qui ne seront pas dites si on ne les dit pas, et même moins profonde de notre esprit, — on ne puisse plus tout d'un coup les dire. On ne se considère plus que comme le dépositaire, qui peut disparaître d'un moment à l'autre, de secrets intellectuels, qui

disparaîtraient avec lui, [...]¹⁵⁾

死の脅威を強く感じていた当時の作家の状況を色濃く反映しているこの節において、ブルーストは語るべき事柄を二つに弁別している。「最も言いたいこと」(« les choses qu'on désirait le plus dire »)とは「あのより高く密やかな理想」(« ce plus haut et plus secret idéal »)を表すものであって、これは文学・芸術の創造を意味していることは明瞭であろう。それに対して、「次に来ること」(« celles qui venaient ensuite »)とは「われわれの精神のさほど深くない部分」(« une partie moins profonde de notre esprit »)と関わっており、これまで言われたことのない「知的な秘密」を明らかにするものである。これは言うまでもなく文学論あるいは芸術論のことである。要するにここでは、創作と批評という二種の文学的・芸術的営為が区別されていることに注意しておきたい。

ブルーストはサント=ブーヴを語るに際して、ポール・ブルジェやイポリット・テーヌの同批評家に対する見方を援用している。テーヌのサント=ブーヴに対する評価は、人間精神の研究に博物誌の手法を導入したという点にあり、学問の方法論の創始者とみなしている。この見方に対してブルーストは次のような反論を提出している——「芸術においては創始者も先駆者もない。すべては個人の中にある。」¹⁶⁾ 芸術における進歩主義の否定と個人主義の肯定はブルースト自身の芸術観の表明であるが、これはサント=ブーヴではなく、テーヌに対する反論であることは興味深い。ところでこの反論は正当であろうか。テーヌはサント=ブーヴの批評方法を評価し、人間精神に関する学問の創始者とみなしているのであるが、ブルーストは芸術すなわち芸術創造を問題にしているのである。芸術そのものと、芸術に対する見方とは原理的に言って異なる。要するに、ブルーストはテーヌとは違った対象を問題にしていると言えよう。ところが奇妙なことに、彼は芸術と批評を同列に置いているように思われる——「しかし

芸術の中に現実的なもの、あらゆる科学から独立したものを見出すことができなかった哲学者たちは、芸術や批評なども、先人が必然的に後続者より進んでいない科学のように想像するほかなかったのだ。」(« Mais les philosophes qui n'ont pas su trouver ce qu'il y a de réel et d'indépendant de toute science dans l'art, ont été obligés de s'imaginer l'art, la critique, etc. comme des sciences où le prédécesseur est forcément moins avancé que celui qui le suit. »)¹⁷⁾ 芸術においても、批評においても進歩主義は否定され、科学とは異なることが主張されているのだ。このように芸術創造と批評活動を同種の営為とみなすなら、プルーストのテーヌに対する反論は正当化されるであろう。

創造と批評がほとんど同一視されていると思われる例をもう一つ見てみよう。サント=ブーヴは作家を研究し、評価する際に、その作家にまつわるあらゆる資料を蒐集したことに対して、プルーストは後に有名になる次のような説を主張する。

[...] cette méthode méconnaît ce qu'une fréquentation un peu profonde avec nous-même nous apprend : qu'un livre est le produit d'un autre moi que celui que nous manifestons dans nos habitudes, dans la société, dans nos vices. Ce moi-là, si nous voulons essayer de le comprendre, c'est au fond de nous-même, en essayant de le recréer en nous, que nous pouvons y parvenir. Rien ne peut nous dispenser de cet effort de notre cœur. Cette vérité, il nous faut la faire de toutes pièces et ... Il est trop facile de croire qu'elle nous arrivera un beau matin dans notre courrier, sous forme d'une lettre inédite qu'un bibliothécaire de nos amis nous communiquera, ou que nous la recueillerons de la bouche de quelqu'un qui a beaucoup [connu] l'auteur.¹⁸⁾

サント=ブーヴを批判しながら、プルーストはここにおいて再び彼自身

の芸術観を表明している。人間の中にいわゆる創造的自我と社会的自我という二つの自我を区別して、芸術創造に携わるのは前者であって、社会活動の中に現れる自我を検証しても、芸術の本質を捉えることはできないという有名なテーゼがこれである。注目すべきことは、この節の前半(« Cette vérité, il nous faut la faire de toutes pièces et... »まで)と後半の微妙な差異である。前半においては、「書物はもう一つの自我の産物である」と書かれているように、文学創造が問題になっている。「その真実」(« cette vérité »)とは奥深い内面において再創造すべき深い自我のことであるが、この節の後半において、その真実が書簡や作家の知り合いからの情報によってもたらされると信じるのはあまり単純すぎると述べている。これはまさしくサント=ブーヴの批評方法を指している。要するに、同じ「深い自我」を対象にしながら、前半では文学創造、後半では文学批評が問題になっているのだ。それにもかかわらず、ここにおいてはブルーストはこの二つの活動を区別しているようには思えない。文学創造において創り出すのも、批評において捉えるのも同じく「深い自我」なのだ。

思い出さなければならないのは、「サント=ブーヴの方法」の冒頭において、創造と批評をはっきりと区別していたことである。無意識的記憶を基盤に据えた創造と知性に基づく批評を異なる営為とみなしていたのだ。上に見た二つの例は確かにこの考えとは矛盾しているように思われる。「ブルースト45」という資料はもちろん決定稿ではなく、あくまで下書きである。繰り返しや中断もしばしば見られ、このような矛盾があっても不思議ではない。サント=ブーヴやテーヌの文学観と対決するうちに、創造と批評の表裏一体の関係に気づいていったのではないだろうか。他者の作品の中に「深い自我」を見出す批評活動も、自分自身の過去に「深い自我」を再び見出す創造行為もともに同じ営為であるとの認識に達したのかも知れない。後に創り出す『失われた時を求めて』という小説は物語と批評を総

合させたものである。それを可能にしたのは、サント＝ブーヴ論を執筆しながら、創造と批評との根元的な関連を認識するに至ったからだと言うことができるだろう。

注

- 1) *Correspondance de Marcel Proust*, Tome VIII, p.286, p.316.
- 2) これはヨハネによる福音書12章35－36節からの引用と思われるが、原文は以下の通りである — 「光がある間に歩いて、闇に追いつかれないようにしなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかっていない。光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい。」
- 3) *Contre Sainte-Beuve précédé de Pastiches et mélanges et suivi de Essais et articles* (以下 *CBS* と略す), « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p.219.
- 4) *Le Carnet de 1908*, établi et présenté par Philip Kolb, Gallimard, 1976, p.61.
- 5) 『ブルースト全集』第14巻、p.478-479.
- 6) *Correspondance de Marcel Proust*, Tome VIII, p.320-321.
- 7) *Le Carnet de 1908*, p.65.
- 8) *CSB*, p.234-235.
- 9) Jean-Marc Quaranta, «Le Carnet 1 : Éléments pour une genèse des théories proustiennes», *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 29, 1998, p.17.
- 10) 強調はブルーストによる。
- 11) *Le Carnet de 1908*, p.60.
- 12) 同書、p.66.
- 13) 同書、p.67.
- 14) 同書、p.71.
- 15) *CSB*, p.219.
- 16) 同書、p.220.
- 17) 同書、p.220.
- 18) 同書、p.221-222.